

『歡喜の余滴』より抜粋

私は本当に仕合せ者だ

大正十三年五月三日

何たる広大な慈悲だろう、この穢身この悪性のなりが正定聚とは思議ではないか、絶対ではないか。此の無限の親心に生かして下さったのは偏にお母様の念力である。どうした尊い親様だろう。百万円の富も一朝にして灰となり、水となり、埋もれたり、破戒されたりするけれども、無上宝珠の名号は十方世界に満ち満ちている功德大宝海であるから尽きる時がない。聖人様は不可称不可説不可思議の信樂と仰せられたが、今の私の気持ちは泣くにも泣かれぬ嬉しさで生命を投出して妙法を宣布せずにはいられない。

嗚呼 お母様は私に出離の大道を教えて下さった大善知識である、私が満足する迄はお母様も満足し切らなかつた 法蔵菩薩の行をしていて下さった阿弥陀如来様の化身である。無量永劫從苦入苦せねばならぬ私を永遠に生かして下さった大導師である、娑婆往来八千遍と言うのは私を今の境地迄追い出して下さったお母様が釈尊の化現身替りである。

嗚呼救われた嬉しさ、生かされたばしさ、こんな広い世界を知られない世間の方々に早く知らせて上げたいものだ、自覚があれば必ず覚他と動く、之が仏の慈悲なのだ、地位も名誉も家庭も私を縛る道具なのだ、何に成つても苦しいのなら独身で苦しむ方が軽いに違いない。学問して出世した処で同士でれるだけなのだ。醒めよ！ 帰れよ聖の魂に 泣いても笑うても真実の道は一本きりだ。動きのとれない私が広大無辺の御親に撰取されて見れば、不定聚の人々を覚まさずにはいられないではないか、それが救われた者の尊い使命であり、果さなければならぬ義務である。